［二〇二二年度大会シンポジウム］特集　人と動物のかかわりの思想史

記憶の無い所にも歴史があるといふこと

――「人と動物」のかかわりと美・倫理・偶然――

河野有理

ちやうど初冬の此頃のやうな晴れた日に、筒袖の子供が十四五人、窓の外の日当たりに並んで居て、獣の話に時の早きを恨んだことを、今でもあり〳〵と覚えて居る。（『孤猿随筆』一九三九年、『柳田國男全集』第十巻、筑摩書房、一九九八年、二二二頁）

柳田国男によれば、子どもは「獣の話」を好むという。これは、昔話、おとぎ話に様々な動物が活躍しているから、その影響で子どもがそうした動物たちを好むようになったというのではない。因果関係はむしろ逆なのであって、子どもが元来、動物の話が好きだからおとぎ話に動物があふれるのである。「彼等が獣の話に興味をもつのは殆と天性に近いものが有る」。柳田はそう言い切る。ではなぜなのか。それは「以前の平明簡易なる人生に於いては、是が老幼共同のたつた一つの話題であつた時代」があったからである。

自分だけはこの小児が獣の話を愛する癖を、狩小屋以前からの遺物と思つて居る。茫漠として威圧する無限の山野、是に直面して我々と共に活き、或は敵として又は友邦として、隣を接して居た幾つかの獣の社会を、知らず窺わずに過すことの出来なかつた時代が曾ては有つて、その鋭敏なる関心が一部小児の群にはまだ保存せられて居るのである。（同前、二二三頁）

古代の人類の生活の「遺物」が、まだ人類としては幼い個体のうちに保存されている。いかにも方言集圏論の提唱者らしく刺激的なこの仮説は、しかし単に楽しいというだけのものではない。それは「民俗学」にとって存外大きな意味を持っていると、柳田は言う。

> 獣を人と比べるのはひどい話だが、歴史の存在を無視せられて居た者のあることは双方似て居る。記憶の無い所にも歴史があるといふこと、文書が聊かも伝へようとしなかつた生活にも、なお時代の重要なる変遷はあつて、尋ね知らうと思へば之を知る途は確かにあるといふこと、この二つは日本民俗学の出発点であつた。（同前）

柳田がこう書き付けたのは一九三九年一一月のこと。一九三五年三月に東京帝国大学教授に就任し、自他ともに認める史学界の雄となった平泉澄が「百姓に歴史はありますか……豚に歴史はありますか」と学生に凄んでみせていたらしいことを（斉藤孝『昭和史学史ノート』小学館、一九八四年）、柳田が意識していたかどうかは分からない。だが、ここで柳田が「歴史の存在を無視せられて居た者」として示す二つの空白が、偶然というにはあまりに見事な対称を平泉流「精神史」との間に見せていることは疑いないだろう。

柳田の卓見を、民俗学の専有物にしておくのはあまりに惜しい。事実、そうはならなかった。戦後の史学・思想史学が「文書が聊かも伝へやうとしなかつた生活」、すなわち民衆史の分野を開拓していったことは周知に属する。さらに「記憶の無い所」、つまり動物についても、近年の泰西史学界において単なる自然史・環境史にとどまらず人とのかかわりに注目した新たな研究潮流が生じつつあるとは、私のような流行に疎いものにまで聞こえてくるところである。本年度の学会大会は、柳田の遺産に敬意を払い、また近年の潮流に棹さす意味でも「人と動物のかかわり」をテーマとすることにした。

詳しくは各報告者の論考を見て頂きたいが、私見によれば三報告は動物とのかかわりを通してそれぞれ重要な思想史的テーマを浮かび上がらせることに見事に成功しているように思われる。

真辺報告が着目したのは猫である。いかにも『猫が歩いた近現代――化け猫が家族になるまで』（吉川弘文館、二〇二一年）の著者にふさわしく、真辺は「猫好き」の歴史性を丹念に解きほぐしつつ、室生犀星や谷崎潤一

郎といった創作者のテクストのなかで猫がある種の美的感覚の享受対象として浮かび上がってくる瞬間を補足しようとする。

板東報告が取り上げるのは犬である。板東は、江戸期、まさに「共に活き、或は敵として又は友邦として、隣を接して居た幾つかの獣の社会」（柳田）としての「犬の社会」の自然史的・社会史的態様に意を払いつつ、人ならざる犬たちのサーガたる『南総里見八犬伝』において「人たれ」と説く儒学的徳目がむしろ異様な緊張感とともにいきいきと立ち現れてくることに注意を促す。

伊藤報告は狐である。伊藤は、『日本霊異記』を中心に、動物との触れ合いがわたしたちにわたしたちの生の根本的な偶然性を突き付ける体験でありうることを示そうとする。わたしたちが動物に生まれなかったのはおそらく完全に偶然なのである。そうであるとすれば人間であるとはいったいどういうことなのか。

真辺報告における美、坂東報告における倫理、伊藤報告における偶然性。これらは思想史上の根本的テーマであることについて異論は少ないだろう。最初から、こうした三幅対を企図したわけではない。報告者の類まれな力量がテーマに立体的な奥行きをもたらしてくれた。改めて報告者とコメンテーター、そして会場の皆様に感謝したい。

「私などは今でも獣の話をすると、小さな頃を思い出して楽しくなる」（『柳田國男全集』第十巻、二二三頁）と柳田は言う。本大会もそうであった。二年越しに対面でお会いした会員の方々ともに「獣の話」に興じることができたのは、何より楽しかった。

（法政大学教授）